



喜多埜

キタの大火 百年

今から百年前の明治四十二年(1909)七月三十一日、日本の火災史に残る「**キタの大火(天満焼け)**」が発生しました。延焼範囲一・二平方キロ米、焼失戸数一万户以上という、都市火災としては未曾有の大災害でした。

出火は現在の**大阪市北区空心町2丁目**のメリヤス製造業者宅。おりからの東風により瞬く間に燃え広がり、現在の**天満**、**曾根崎**、**福島**に至るまでの殆どを**焼き尽くし**、あまりの被害の大きさに、日本ですべて**軍隊が災害救助**の為に出勤し、**天皇陛下**から御見舞金が出賜されたほどでした。当時の記録では**当神社の御本社のすぐ南(現在の兎我野町あたり)**まで火の手が迫っていたようです。

この火事の時、消防は今のように設備も態勢も整っていないだったので、**消火活動**は専ら**地域の人々**によって行われました。特に、**キタの親分**として知られた**小林佐兵衛**の活躍は知られています。

しかし、現代。このような火事があっても**地域の力で消火**などまず不可能といわれています。皮肉な事に、防災体制の拡充により**災害が減った分**、**地域の連帯感**も失われたのかもしれない。しかしいつ起きるか分からない災害。**日頃の備えと、近所のお付き合い**の大切さを今一度見直したいものです。

くわばらくわばら

大阪で一番落雷の多い時期は夏の時期、とりわけ**七月から八月**がもっとも多いとされ、特に近年は**電子機器**が落雷による**電圧異常**で故障する事例が増えており、最も身近な天災として雷は昔も今も怖いものの代名詞です。

この雷除けのおまじないに「**くわばら**」という言葉があります。今でこそ「とばつちり除け」に唱えられる方が多いですが、元々は**雷除け**のおまじないでした。この言葉の由来には諸説あり、有名なものに**雷神・天神さま**こと菅原道真公にまつわる説話があります。

道真公が生前に所有されていた**領地**に、**桑原**というところがあり、ここは**天神さま**の所領なので**ご加護**があつて**雷が落ちない**という説と、**桑原**という土地の**井戸**に**雷神**となった**天神さま**が不意に落ちたところ、いじわるなおばあさんに**フタ**をされて出られなくなり、出して貰う為の交換条件として、**桑原の地には雷を落とさない**と約束したという説とあります。この事から「**くわばら**」と唱えれば**雷**は雷を落とさないという信仰が生まれました。ちなみに、この**桑原の地**がどこなのかは定かではありませんが、**福岡**や**京都**、**大阪府**和泉市などが有力な比定地となっています。

この**天神さま**の話にあやかつてか、**江戸中期**には**桑原姓**が増え、当神社の氏子で元禄時代に「**菅家聖廟伝**」という書籍を出版した**桑原梅性**という人も**桑原姓**を名乗っていた事からも察せられるように、昔の人は雷に**天神さま**の「**神鳴り**」が如き**神威**を感じ、**天神さま**に縁ある「**くわばら**」を名乗つてまで、ひたすらご加護を祈念していました。それほど**雷**は身近で怖いものだったようです。

神社携帯サイトのQRコード



ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応

編者 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

